

教員は道徳科の授業にどのようなイメージをもっているか (2)

沖林 洋平^{*1}・池永真依子^{*2}・中川 穂^{*3}・藤永 啓吾^{*4}

How do teachers think about teaching moral education? (2)

OKIBAYASHI Yohei^{*1}, IKENAGA Maiko^{*2}, NAKAGAWA Minori^{*3}, FUJINAGA Keigo^{*4}

(Received August 3, 2023)

キーワード：特別の教科 道徳、道徳科の授業イメージ尺度、一般化線形モデル

はじめに

附属学校では、『特別の教科 道徳』学びの会』(以下、「学びの会」と題する、教員や一般の教育関係者、教職を志す大学生等を対象にした研究会を継続的に行っている。この研究会では、平成30年度から小学校、平成31年度から中学校で、教育課程における道徳の時間が「特別の教科」化されることを踏まえて、平成29年度より発足した。表1に、2021年度以降の開催内容を示した。

2021年度以降は、学びの会に対する参加者の満足度だけでなく、特別の教科 道徳に関する授業イメージについても調査を行っている。調査項目は、先行研究(沖林ら、2021)の項目を用いた。沖林ら(2021; 2022)では、学びの会の参加者は、道徳科の授業を「児童生徒自身の問題を仮説検証や試行錯誤によって解決する時間である」、「道徳の授業は児童生徒自身が自らの価値を発見する時間である」といった学習者関与的授業イメージをもって授業実践に取り組んでいることが示された。さらに、学習者関与的授業イメージは、職務年数によって変動するわけではないこと示された(沖林ら、2022)。本研究でも先行研究の調査について追試を行うこととした。教員の道徳の授業イメージに関する連続的な調査研究は、我が国においては本研究において見られない。道徳の授業実践に対する苦手感情に対する調査研究の結果、中央教育審議会(2014)の「道徳に係る教育課程の改善等について」(答申)において、「授業に対する児童生徒の受け止めがよくない状況にあること、学校や教員によって指導の格差が大きいことなど多くの課題が指摘されており、全体としては、いまだ不十分な状況にある」と指摘されている。井・鈴木(2017)は、中学校教師に対する道徳の授業に対するインタビューを行っている。その結果、「話し合いを導きたい方向に持っていけない」「生徒が授業に真剣に取り組まない」といった苦手意識があることを明らかにした。

山口県においても、道徳の授業に対する有益な情報は希求されている。学びの会では、授業実践の方法、評価の在り方、近年では改訂された生徒指導提要の読み方に関する研修が行われており、参加者から高い評価を得ている。

また本研究の目的として、道徳科における学習者主体的な授業イメージを促進する要因について検討することとした。道徳科における学習者主体的な授業づくりを促進する要因が明らかになることで、道徳科の授業づくりにおける教員に対する学習者主体的な授業づくりのための手がかりを提供することができると考えられる。また、学びの会のような実践性の高い研究会においても教員研修に関する基礎的なデータの提供ができることを示すことで、いわゆる理論と実践、研修の実践と科学的手法によるデータの蓄積の往還関係を示すことができる。以上のような目的のもと、本研究では学びの会の参加者を対象として、学びの会に対する意識調査を行うとともに、道徳科の授業イメージに関する調査を行った。

*1 山口大学教育学部小学校総合選修 *2 山口大学教育学部附属光小学校 *3 山口大学教育学部附属山口小学校
*4 山口県教育庁教育情報化推進室活用推進班(元 山口大学教育学部附属光中学校)

表1 学びの会の2021年度以降の開催スケジュールと講演者、講演内容

	日時	場所	講演者	テーマ
第13回	2021年 10月23日 (土)	オンライン	丸岡慎弥	模擬授業Ⅰ
			安井政樹	模擬授業Ⅱ
			藤永啓吾	模擬授業Ⅲ
			浅見哲也	
			坂本哲彦	シンポジウム
			温品賢二	
第14回	2021年 12月4日 (土)	オンライン	藤永啓吾	模擬授業
			白井俊	
			永田繁雄	シンポジウム
第15回	2022年 2月19日 (土)	オンライン	中川穂	実践発表Ⅰ
			池永真依子	実践発表Ⅱ
			温品賢二	
			森重孝介	パネルディスカッション
			藤永啓吾	
第16回	2022年 6月25日 (土)	オンライン	池永真依子	教材分析→吟味
			中川穂	
			藤永啓吾	問い創り
			森重孝介	板書創り
			久保田高嶺	研修創り
			温品賢二	講演
温品賢二 他	パネルディスカッション			
第17回	2022年 11月23日 (土)	山口大学	中川穂	小学校授業体験
			藤永啓吾	中学校授業体験
			山田貞二	特別講演
			山田貞二 他	パネルディスカッション
第18回	2023年 2月25日 (土)	セミナー パーク	藤永啓吾	授業づくり最初の一步
			森重孝介	発問創りⅠ
			中川穂	発問創りⅡ
			藤永啓吾	生徒指導提要のポイント
			藤永啓吾 他	パネルディスカッション

2. 方法

2-1 調査時期

本研究は、2022年11月と2023年2月に実施された「特別の教科 道徳学びの会」終了後に行われた。2022年6月時点は令和4年度学部附属共同研究プロジェクトの応募前であったため調査は実施されなかった。

2-2 調査対象者

本研究の調査対象者は道徳学びの会参加者のうち回答が得られた38名が調査対象者であった。

2-3 材料

本研究では以下の質問項目を設定した。1. 性別 2. 職務年数 3. 所属校種 4. 専門(1. 道徳、2. 教科、3. 生徒指導、4. マネジメント) 5. 参加回数 6. 学びの会参加に対する意識を尋ねる項目を尋ねた。項目は、これからも参加したい、次の開催を楽しみにしている、同僚に知らせたい、他教科の授業づくりに役立つ、幼小中高を選ばず役立つ、教育相談や生徒指導にも有効だ、法定研修で行われてもよい、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ、最新の教育の話題について知ることができる、であった。回答は7件法であった。7. 道徳の授業イメージに関する項目を尋ねた。項目の内容は、表8に示す。

2-4 手続き

本研究の調査は学びの会終了後に、参加者に回答用ウェブサイトのアドレスが示され、調査に回答したものはウェブサイトへアクセスして回答した。回答には5分程度を要した。

3. 結果

属性に関する質問項目の結果を示す。表2に性別と学校種のクロス集計表を示す。

表2 性別と学校種のクロス集計表

	男性	女性	合計
幼稚園	0	0	0
小学校	5	14	19
中学校	9	3	12
特別支援学校関連	1	0	1
教育委員会等	0	2	2
その他(大学生、大学院生、企業など)	1	3	4
合計	16	22	38

表3に性別と専門のクロス集計表を示す。

表3 性別と専門のクロス集計表

	男性	女性	合計
ICT関連(プログラミングを含む)	2	1	3
マネジメント	2	3	5
国際理解	0	1	1
地域連携	2	0	2
教科指導	7	7	14
教職の勉強	1	0	1
特別支援関連	2	5	7
生徒指導	0	5	5
合計	16	22	38

表4に学校種と専門のクロス集計表を示す。参加者は男性が22名、女性が16名であった。

表4 学校種と専門のクロス集計表

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別 支援学校	大学生	教職 大学院生	教育 委員会等	合計
ICT 関連 (プログラミング を含む)	0	1	2	0	0	0	0	0	3
マネジメント	0	3	2	0	0	0	0	0	5
国際理解	0	0	0	0	0	1	0	0	1
地域連携	0	0	2	0	0	0	0	0	2
教科指導	0	6	6	0	0	0	1	1	14
教職の勉強	0	0	0	0	0	1	0	0	1
特別支援関連	0	4	0	0	1	0	1	1	7
生徒指導	0	5	0	0	0	0	0	0	5
合計	0	19	12	0	1	2	2	2	38

表5に学校種とこれまでの学びの会の参加回数のクロス集計表を示す。調査時に初めての参加だったものは、38名中の14名であった。

表5 学校種と参加回数のクロス集計表

	1	2	3	4	5回以上	合計
幼稚園	0	0	0	0	0	0
小学校	4	2	4	3	6	19
中学校	5	1	3	0	3	12
高等学校	0	0	0	0	0	0
特別支援学校	0	0	0	0	1	1
大学生	2	0	0	0	0	2
教職大学院生	2	0	0	0	0	2
教育委員会等	1	0	1	0	0	2
合計	14	3	8	3	10	38

表6に学校種と職務年数のクロス集計表を示す。20年以上という回答をしたものが16名であった。

表6 学校種と職務年数カテゴリのクロス集計表

勤務年数カテゴリ	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	大学生	教職 大学院生	教育 委員会等	特別 支援学校	合計
10年未満	0	5	3	0	2	2	0	0	12
20年未満	0	6	3	0	0	0	1	0	10
20年以上	0	8	6	0	0	0	1	1	16
合計		19	12		2	2	2	1	38

表7に学びの会に対する意識に関する質問項目の回答についての平均値、標準偏差、中央値を示す。得られた要約統計量は男女別に示している。

表7 意識に関する質問項目の平均値、標準偏差

項目	性別	平均値	標準偏差	中央値
Q2-1 学びの会にはこれからも参加したいと思う	女性	6.73	0.63	7.00
	男性	6.75	0.45	7.00
Q2-2 学びの会の次の開催を楽しみにしている。	女性	6.73	0.63	7.00
	男性	6.81	0.40	7.00
Q2-3 学びの会のことについて同僚に知らせたい	女性	6.50	0.80	7.00
	男性	6.31	1.08	7.00
Q2-4 学びの会の内容は道徳以外の教科の授業づくりに役立つ	女性	6.45	0.80	7.00
	男性	5.94	1.44	7.00
Q2-5 学びの会の内容は幼小中を選ばず役立つ	女性	6.50	0.67	7.00
	男性	5.81	1.38	6.00
Q2-6 学びの会の内容は教育相談や生徒指導にも有効だ	女性	6.36	0.90	7.00
	男性	6.19	1.17	7.00
Q2-7 学びの会の内容は「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ	女性	6.45	0.91	7.00
	男性	6.00	1.79	7.00

表8に、道徳の授業のイメージについて尋ねた項目の回答の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表8 男女別の道徳の授業イメージの平均値、標準偏差、中央値

項目	性別	平均値	標準偏差	中央値
Q3-1 道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である	女性	5.59	0.59	6.00
	男性	5.56	0.63	6.00
Q3-2 道徳の授業は児童生徒自身の問題を仮説検証や試行錯誤によって授業の課題を解決する時間である	女性	5.05	0.79	5.00
	男性	4.69	1.20	5.00
Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である	女性	2.86	1.08	3.00
	男性	3.19	1.38	3.00
Q3-4 道徳の授業でも情報モラルやLGBTの理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である	女性	4.77	1.07	5.00
	男性	5.25	0.77	5.00
Q3-5 他教科で学んだことを道徳の授業に生かす時間である	女性	4.59	1.10	4.50
	男性	4.31	1.35	5.00
Q3-6 道徳の授業で扱う内容にはそれぞれの授業で唯一の正しい答えがあると思う	女性	2.00	1.23	2.00
	男性	2.06	1.34	2.00
Q3-7 授業で取り上げる道徳的価値は児童生徒の生き方の自覚とは関係ない場合もある	女性	2.27	1.39	2.00
	男性	2.31	1.74	1.50

表 9 に道徳の授業イメージに関する項目の相関係数を示した。

表 9 道徳の授業イメージの相関係数

	Q3-1	Q3-2	Q3-3	Q3-4	Q3-5	Q3-6	Q3-7			
Q3-1	—									
Q3-2	0.52	***	—							
Q3-3	0.15		0.34	*	—					
Q3-4	0.44	**	0.22	0.28	—					
Q3-5	0.21		0.18	0.24	0.47	**	—			
Q3-6	-0.02		0.11	0.39	*	0.04	0.38	*	—	
Q3-7	-0.13		0.04	0.46	**	-0.23	-0.12	0.33	*	—

Note. * p < .05、 ** p < .01、 *** p < .001

道徳授業イメージの得点を従属変数として回答者を分類するために、クラスタ分析を行った。Distance measure は euclidean、Clustering method は ward.D2 であった。デンドログラムを確認した結果、2 クラスタが妥当であると判断した。

得られたクラスタの特徴を確認するために、クラスタ分析で用いた従属変数がクラスタによってどのように異なるのかについて検討することとした。具体的には、道徳授業イメージを実験参加者内要因 (7) × クラスタを実験参加者間要因 (2) とする 2 要因分散分析を行った。その結果道徳授業イメージの主効果

($F(6, 216) = 34.22, p < .001$)、クラスタの主効果 ($F(6, 216) = 34.22, p < .01$)、2 要因の交互作用 ($F(6, 216) = 3.80, p < .001, \eta^2 = 0.19$) が有意であった。

多重比較を行った結果、「道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である」($t(36) = 5.81, p < .001$)、「道徳の授業でも情報モラルや LGBT の理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である」($t(36) = 5.79, p < .001$) でクラスタ 1 がクラスタ 2 よりも有意に高かった。なお、「道徳の授業は児童生徒自身の問題を仮説検証や試行錯誤によって授業の課題を解決する時間である」、「他教科で学んだことを道徳の授業に生かす時間である」もクラスタ 1 がクラスタ 2 よりも高い値を示している。

沖林ら (2021) では、同様の項目を因子分析によって 2 つの因子を構成し、因子ごとの得点の違いを検討した。本研究でも同様の傾向が見られたため、道徳授業イメージに関する項目を「学習者関与的授業」イメージと「学習者分離的授業」イメージの 2 つの要因に分けて分析を行った。なお、「学習者関与的授業」イメージには、Q3-1、Q3-2、Q3-4、Q3-5 として、「学習者分離的授業」イメージは、Q3-3、Q3-6、Q3-7 とした。

道徳の授業に対する「学習者分離的授業」

イメージ因子と道徳の授業に対する「学習者関与的授業」イメージについて、それぞれの平均値と標準偏差、因子間の相関係数を算出し、表 10 に示した。

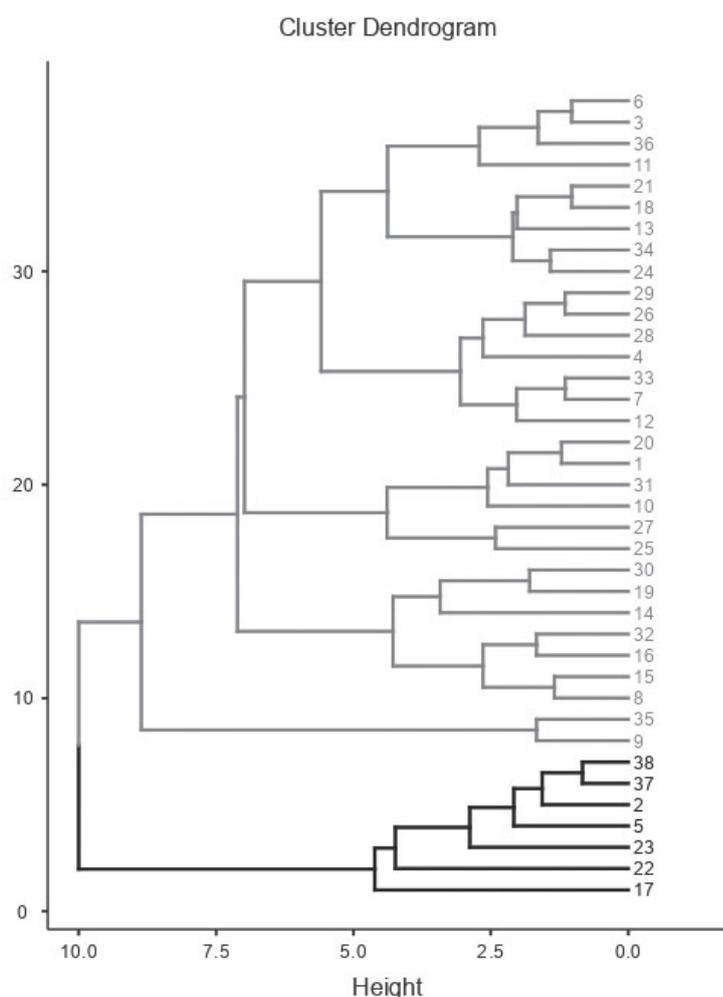


図 1 クラスタ分析におけるデンドログラム

表 10 道徳の授業イメージの因子別の平均値、標準偏差、中央値

	平均値	標準偏差	中央値
「学習者関与的授業」イメージ	4.98	0.67	5
「学習者分離的授業」イメージ	2.44	1.03	2.33

表 11 に、道徳の授業イメージの因子について、男女別の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表 11 道徳の授業イメージの男女別の平均値、標準偏差、中央値

		平均値	標準偏差	中央値
「学習者分離的授業」イメージ	女性	5	0.68	5
	男性	4.95	0.67	5
「学習者関与的授業」イメージ	女性	2.38	0.92	2.33
	男性	2.52	1.19	2.33

表 12 に道徳の授業イメージの因子について、職務年数カテゴリ別の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表 12 道徳の授業イメージの職務年数カテゴリ別の平均値、標準偏差、中央値

	職務年数カテゴリ	平均値	標準偏差	中央値
「学習者分離的授業」イメージ	10 年未満	4.79	0.53	4.75
	20 年未満	4.98	0.92	5
	20 年以上	5.16	0.53	5.13
「学習者関与的授業」イメージ	10 年未満	2.51	0.78	2.67
	20 年未満	2.12	0.65	2.33
	20 年以上	2.62	1.41	2.33

表 13 に道徳の授業イメージの因子間相関を示した。図 2 に道徳の授業イメージの因子間の散布図を示す。

表 13 道徳の授業イメージの因子間の相関係数

	a	b
「学習者分離的授業」イメージ	a	—
「学習者関与的授業」イメージ	b	0.16

Note. * $p < .05$ 、** $p < .01$ 、*** $p < .001$

2 因子間の相関係数は $r = 0.16$ と有意な相関は得られなかった。

道徳授業イメージの 2 機能を参加者内要因 (2)、クラスタ (2) を参加者間要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果、2 要因の交互作用が有意であった ($F(1, 36) = 9.05$, $p < .05$, $\eta^2 p = 0.20$)。多重比較の結果、「学習者関与的授業」イメージにおいてクラスタ 1 がクラスタ 2 よりも有意に高かった ($t(36) = 6.01$, $p < .001$)。図 3 に各クラスタにおける授業イメージを示す。

学習者関与的授業イメージを促進する要因を検討するために、学習者関与的授業を従属変数とする回帰分析を行った。回帰分析の結果を表 14 に示す。Q3-4 「道徳の授業でも情報モラルや LGBT の理解などの現

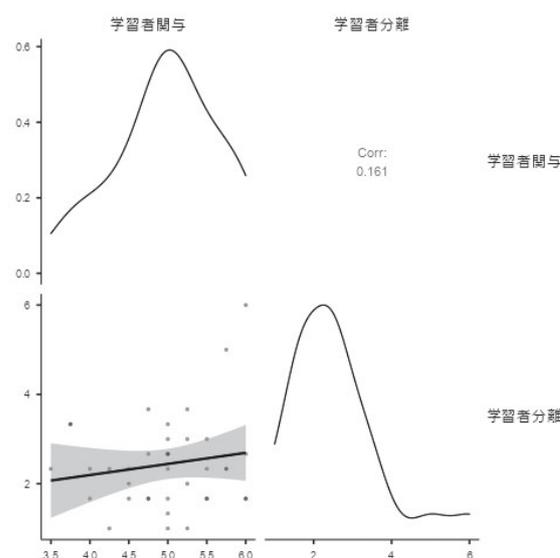


図 2 道徳の授業イメージの因子散布図

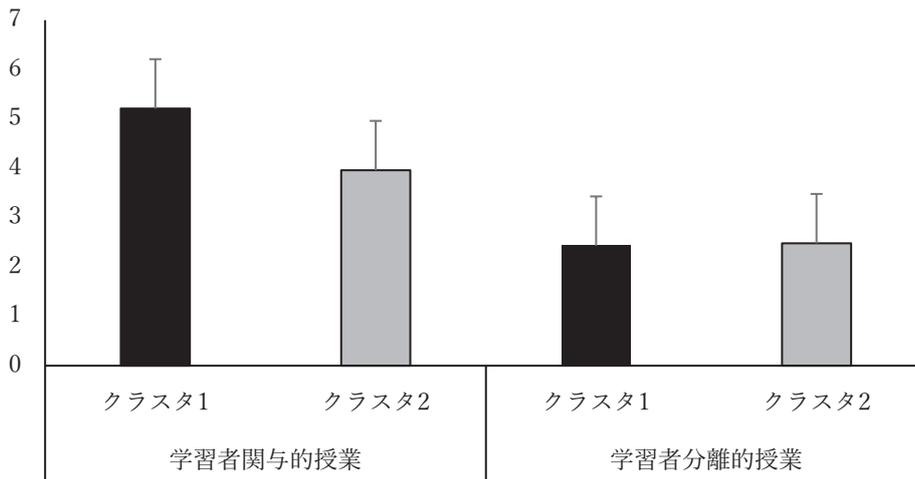


図3 各クラスタにおける授業イメージ

代の社会的問題の理解を深めることができる時間である」は不適であったため除外した。学習者関与的授業に影響を及ぼすのは、Q3-1、Q3-2、Q3-5であった。これら3項目のうち交互作用が見られた組み合わせはなかった。

表14 学習者関与的授業と道徳科の授業イメージの回帰分析

説明変数	推定値	標準誤差	t	p	標準化推定値	95%信頼区間	
						下限	上限
Q3-1 価値	0.75	0.14	5.46	<.001	0.67	0.42	0.92
Q3-2 試行錯誤	0.44	0.09	5.11	<.001	0.65	0.39	0.91
Q3-3 教科書	0.2	0.09	2.38	0.022	0.37	0.06	0.68
Q3-4 社会的問題	0.52	0.07	7.03	<.001	0.76	0.54	0.98
Q3-5 他教科	0.41	0.06	6.55	<.001	0.74	0.51	0.97
Q3-6 唯一の答え	0.12	0.09	1.39	0.173	0.23	-0.1	0.55
Q3-7 生き方無関係	-0.07	0.07	-0.94	0.356	-0.15	-0.49	0.18

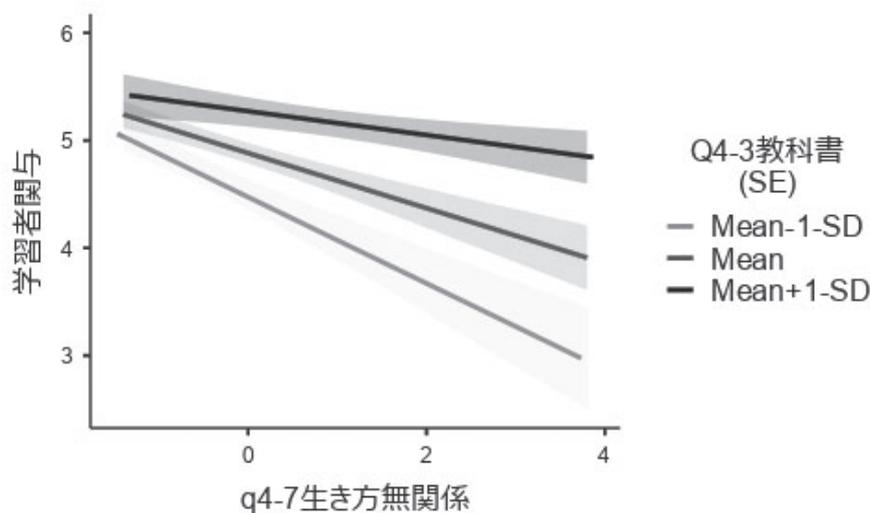


図4 学習者関与的授業に対する道徳科の授業イメージの調整効果

学習者関与的授業イメージを従属変数、「Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である」、「Q3-7 授業で取り上げる道徳的価値は児童生徒の生き方の自覚とは関係ない場合もある」を共変量とする一般化線形モデルによる分析を行った (AIC = 66.53, $\chi^2 = 0.29$)。共変量による影響を表15に示す。また学習者関与的授業を従属変数として、「Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材

の内容を正しく伝えることが最も重要である」の影響における「Q3-7 授業で取り上げる道徳的価値は児童生徒の生き方の自覚とは関係ない場合もある」の調整効果を図4に示す。

単純効果検定の結果、Q3-7の-1SDは有意であり ($\beta = -0.40$, $SE = 0.10$, $p < .001$)、+1SDで有意でなかった ($\beta = -0.11$, $SE = 0.07$, $p = 0.121$)。図3においても、学習者関与的授業をQ3-4の-1SDが+1SDよりも有意に促進している。

表 15 学習者関与的授業イメージに影響を及ぼす授業イメージクラスタにおける「教科書を重視」意識の調整効果

	推定値	SE	exp(B)	95% Exp(B) 信頼区間		z	p
				下限	上限		
(Intercept)	4.88	0.09	131.92	109.66	158.71	51.76	<.001
Q3-3	0.32	0.08	1.37	1.17	1.61	3.84	<.001
Q3-7	-0.26	0.07	0.77	0.67	0.89	-3.6	0.001
Q3-3* Q3-7	0.12	0.04	1.13	1.03	1.23	2.75	0.01

4. 考察

本研究では、特別の教科 道徳「学びの会」の参加者に対する調査を行い、学びの会に対する意識や満足度の調査を行った。調査の結果、以下のことが明らかとなった。これまでの先行研究における調査（沖林ら、2020、2021、2022）でも示されたように、参加者の学びの会に対する高い参加意識や満足感が示された。学びの会の研修テーマについては特別の教科道徳が導入された当初は、教科の特性に関する共通理解を図ることや授業の基本的な構成、一般的なモデル授業の提案などがテーマとして設定されてきた。近年は、効果的なロールプレイの紹介や改訂された生徒指導提要の解説など、道徳科の授業作りをより豊かにするための手法であったり、授業作りや評価に対して媒介的な影響を及ぼすトピックも選定されるようになってきている。今後は、研究会のトピックに関する受講者のニーズ分析も視野に入れる必要がある。

本研究では、道徳科の授業に対する学習者関与的授業イメージを促進する要因を検討した。道徳科の授業に対して受講生が抱えているイメージには、道徳科の授業は学習者の主体性が関わると考える学習者関与的イメージと、学習内容と学習者の主体性は独立であると考えられる学習者分離的イメージがあることがクラスタ分析によって示された。これは、先行研究（沖林ら、2022）を追認するものである。教師の道徳科の授業に対するイメージについては、研究が十分に進められていない。教員が道徳科の授業に対する考え方に関する心理モデルを構築することは、道徳科の授業作りに関する教員の視点を提供することにつながる。

回帰分析によって、学習者関与的授業イメージに関連する道徳科の授業イメージの影響を検討した。その結果、Q3-1、Q3-2、Q3-4、Q3-5 がポジティブに影響することが示された。道徳科の授業における、学習者関与的イメージには、児童生徒の価値に関連させること、試行錯誤の活動を含むこと、社会的問題に関連させること、他教科の学びと関係させることが有意に関連していることが示された。

一般化線形モデルによって学習者関与的授業イメージにおける「Q3-7 授業で取り上げる道徳的価値は児童生徒の生き方の自覚とは関係ない場合もある」における「Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である」の調整効果を示した。この結果は、道徳科の授業を児童生徒の生き方とは無関係であると考えられる場合、教科書を重視しない授業者は「学習者関与的授業」イメージが低下することを示している。本研究で得られた結果は、おおむね先行研究（沖林ら、2021）を支持するものと言える。すなわち、道徳の授業に対する考え方には、授業内容や授業での活動に学習者は関与するという考え方と、授業内容と学習者は独立的であるという考え方である。また、これら2つの考え方の程度によって、教員はクラスタを形成していることも再現された。学習者関与的授業イメージと学習者分離的授業イメージの相関係数は0.16であり、互いに関連はないということが明らかとなった。この関係がネガティブなものであるならば、学習者関与的イメージと学習者分離的イメージは互いにネガティブな影響を及ぼすとバイポーラなモデルを仮定することができるが、本研究で得られた結果を踏まえると学習者関与的イメージと学習者分離的イメージは2次元的なモデルを構成すると考えた方が良好だろう。道徳的なテーマや活動について、状況や領域を区別して、全体的なパターンで考える必要があるという考え方が近年提出されている。

本研究において、道徳の授業イメージを測定することについては、Height (2014) が提唱する道徳基盤理論に基づいている。道徳基盤理論によると個人の道徳観は、ケア / 危害、公正 / 欺瞞、忠誠 / 背信、権威 / 転覆、申請 / 墮落、自由 / 抑圧という6つの基盤によって構成されるとしている (Graham, J., Haidt, J., &

Nosek, B. A., 2009; Haidt, 2014)。Graham et al. (2009) はアメリカ人を対象とした調査の結果、支持する政党によって、重視する道徳基盤が異なることが指摘されている。はっきりした保守支持 (Conservative) ではすべての道徳基盤が重視されているのに対し、はっきりしたリベラル支持でがケア / 危害、公正 / 欺瞞が高いという結果を得ている。本研究では、道徳の授業について保守的、リベラル的価値に対応するような項目を設定し、教員の道徳の授業に対する考え方を測定した。その結果、回答者によって Graham et al. (2009) に対応するようなクラスタが得られた。授業者の道徳の授業に対する考え方にも個人差が見られることが示唆されたと言える。本研究の目的は、道徳の授業実践の効果と授業者の道徳観に関する適性処遇交互作用を検討することではない。ただし、本研究において授業者の道徳の授業に対するイメージについても個人差が認められたので、授業者と授業内容、学習者の関係性について今後検討することが必要であることを指摘する。

引用文献

- 中央教育審議会答申 (2014) : 「道徳に係る教育課程の改善等について」
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf 最終閲覧日 2023 年 5 月 30 日)
- Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009) : 「Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations」. 『Journal of Personality and Social Psychology』 96 (5) , 1029-1046.
- Haidt, J. (2014) : 『The Righteous Mind Why Good Politics and Religion』, Brockman Inc., New York.
- 井陽介・鈴木翔 (2017) : 「「道徳の時間」に対する教師の意識— 中学校教師へのインタビュー調査から —」, 『秋田大学教養基礎教育研究年報』 19, 75-81.
- 文部科学省 (2017) : 「小学校学習指導要領 (平成 29 年度告示) 解説」 特別の教科 道徳編
(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_012.pdf 最終閲覧日 2023 年 5 月 30 日)
- 中村天音・沖林洋平 (2022) : 「道徳基盤に対する道徳意識と寛容性と他者受容の関係」, 『山口大学教育学部研究論叢』 71, 41-47.
- 沖林洋平・松岡敬興・森重孝介・上川里穂・久保田高嶺・藤永啓吾 (2020) : 「「特別の教科 道徳 学びの会」参加者の意識調査」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』 50, 11-18.
- 沖林洋平・松岡敬興・森重孝介・久保田高嶺・藤永啓吾 (2021) : 「「特別の教科 道徳 学びの会」参加者の意識調査 (2)」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』 52, 45-52.
- 沖林洋平・池永真依子・中川穂・藤永啓吾 (2022) : 「教員は道徳科の授業にどのようなイメージをもっているか」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』 54, 35-43.

Appendix

道徳基盤の特徴に関しては、中村・沖林 (2022) に詳述しているので参照していただきたい。